

秋水通信

第 26 号

2019.5.19

幸徳秋水を顕彰する会
四万十市右山五月町 8-22
四万十市立中央公民館
TEL0880-36-2778 (田中)
HP:<http://www.shuusui.com/>
mail:zen-tanaka@heart.ocn.ne.jp

幸徳秋水刑死108年墓前祭

1月24日、秋水108回目の命日、今年も恒例の幸徳秋水墓前祭を開いた。

例年、この日は雪が舞うなど、寒い日となることが多いが、今年は天気に恵まれた。例年と同じくらい約70名集まった。最初に、幸徳秋水を顕彰する会宮本博行会長が追悼文を読み上げたあと、順次菊の花を献花。今年は遺族関係者として長尾正記さんが初めて参加された。

秋水が家を出たあと幸徳家を支えたのは駒太郎であった。駒太郎は久保川村の長尾家に生まれた。幸徳家(俵屋)に下僕として入ったが、その真面目な人柄と仕事ぶりを見込まれ、28歳の時、秋水の伯父篤道(父の兄)の養子になる。秋水は2歳の時父篤明を亡くしている。伯父は父親代わり。同じ屋根の下に同居していた。だから、秋水は駒太郎のことを兄と呼んだ。

長尾家がいまはどうなっているのか



宮本博行顕彰会会長
追悼文朗読

ずっとわからないままであったが、昨年、同じ久保川地区に残っていることが判明。今年の墓前祭に現当主の正記さんをご案内したところ、快く参加してくれた。駒太郎の墓は秋水の隣。自分の実家の子孫(兄のひ孫)が来てくれ心強く思ったであろう。

今年は県外から2名参加。京都府南丹市の奥村正男さんと岡山市の森雄二さん。お二人からはスピーチをいただいた。

奥村さんは京都丹波岩崎草也研究会会員(元代表)で記念講演「岩崎草也と幸徳秋水」の講師としてご招待。市立中央公民館での講演には40名参加。講演要旨は4ページに掲載している。

秋水が大逆罪で刑死した西暦1911年は明治44年。明治は翌年で終わる大正、さらに昭和に。

大逆罪(旧刑法73条)とは天皇家だけを対象にしたもので、危害を加えんと



長尾正記氏献花



参加者

「謀議」をするだけでも死刑。天皇は絶対君主であり、現人神であった。

日本敗戦により旧刑法は廃止され、国民主権の新憲法が制定された。天皇は人間となり、天皇制も廃止されるものと思われた。しかし、「象徴」として温存された。その一つが元号である。

昭和はそのまま継続し、敗戦翌年の昭和21年、駒太郎の長男富治が幸徳家の墓前供養として始めたのがいまの墓前祭の最初である。

秋水は「思うに、百年ののち、だれか私に代わって言ってくれるものがあるであろう」と言い残して絞首台にのぼった。その百年後は平成になっていた。

さらに平成も今年で終わり、5月から令和になった。

初めての生前譲位による代替わりであるが、天皇制のあり方を含めた元号是非の議論はタブーとして封印されたまま、政府はマスコミを動員して、お祭り騒ぎを演じている。改元の政治利用が露骨である。

安倍政権による強権政治で憲法は瀕死の状態、軍備はますます増強、共謀罪では「謀議」も復活した。

平成最後の秋水墓前祭。百年たったのに・・・秋水の嘆きが聞こえてくるようであった。

四万十市郷土博物館
2月1日リニューアルオープン

為松公園にある四万十市立郷土資料館が「郷土博物館」に名称・内容を変え、まじ。人物資料(秋水含む)の常設展示はなくなり、今後は企画展ごとの展示になります。

秋水関連資料の大部分は市立図書館内「幸徳秋水資料室」に保存・展示していることから、今後は「資料室」へ集約する等今後の展示のあり方等について、市側に申し入れ、協議していきたいと思っています。



2階歴史コーナー



郷土博物館

韓国映画「金子文子と朴烈」

パクヨル

中村、高知で自主上映

朝鮮独立三・一事件から100年の今年、朴烈事件をテーマにした韓国映画が全国各地で上映されている。

大逆罪（旧刑法73条）が適用された事件は四つある。幸徳秋水が首謀者に仕立てられた事件が最も有名で「大逆事件」「幸徳事件」とされることが多いが、実際はほかに、時代順に虎ノ門事件（難波大助）、朴烈事件、桜田門事件（李奉昌）もある。

朴烈事件とは、関東大震災のさい拘束された無政府主義者で朝鮮独立運動家の在日の朴烈とその内縁の妻金子文子が裁判の過程で天皇暗殺計画があったと供述したとされ、あとで大逆罪が適用された事件。死刑判決（無期懲役に減刑）を受けた。

二人と幸徳秋水の直接の接点はない。しかし、日本による朝鮮併合は秋水らが逮捕された同年（1910年）であったように、秋水はこの問題に深い関心を寄せ、平民新聞などで論陣を張った。伊藤博文をハルビン駅で暗殺した安重根に対しては、その「義拳」を称える漢詩をつくった。最終湯河原で逮捕された時、カバンの中にその詩を書いた安重根の絵葉書をもっていた。

2011年7月、韓国テレビSBSは毎年8月15日独立記念日に流している特別番組として、その年は朝鮮独立に影響を与えた日本人3人取材するため来日。最初に幸徳秋水の中村に来ていた。ほかの2人は金子文子と、その裁判で弁護活動に奔走した布施辰治（弁護士）。

映画「金子文子と朴烈」（2017年制作）は、人気俳優（イ・ジユン、チェ・ヒソ）を主演に配し、韓国での観客動員235

万人、大鐘賞映画祭で5冠達成という話題を呼んだ作品。

日本映画ではみられないストレートな天皇批判があり、韓国映画特有の小気味のいいほどに早い場面展開に釘付けにされる。日朝関係史を朝鮮の視点から考えることもできる。

映画配給会社（太秦）から「幸徳秋水の中村で」という要請もあり、中村と高知で自主上映します。



韓国映画「金子文子と朴烈」 上映会

6月16日（日）

10時、13時、16時

四万十市立中央公民館ホール

主催 幸徳秋水を顕彰する会

後援 四万十市教育委員会

6月18日（火）

14時、16時半、19時

高知県立美術館ホール

主催 かつてにシネマ

秋・水・餅

田中 全

中村の和菓子店、右城松風堂に秋水餅という菓子がある。もちろん幸徳秋水にちなんだ名前だ。

大逆事件研究者などには結構知られており、秋水墓参の記念に買って帰るようだし、私も手土産などに使っている。みなさんに喜ばれる。

しかし、同店の看板商品の筏羊羹、鮎最中に比べると、一般市民の間では意外に知られていないように思う。

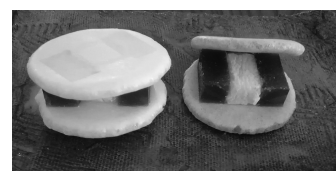
店のルーツは？ 今の4代目女性店主は、右城（うしろ）という珍しい姓は高知市の北、山間部の嶺北地方、長岡郡本山町にしかない、家の古い墓もそこにある明治のいつごろか何かの縁でやってきたようだという。

秋水餅はいつからつくられているのか、これもキチンとした記録がない。秋水の名前を堂々と使えるようになった戦後であることは間違いないだろうが。

そんな中、最近、高知新聞の名コラムニストと言われ、秋水や坂本清馬とも交わった中島及が秋水餅について書いている文章を見つけた。昭和30年8月、「県民クラブ」（高知新聞発行）に書いた「秋水餅」に寄せてである。（鍋島高明編『中島及著作集 一字一涙』2014年高知新聞社刊所収）

これによれば、中村の幸徳富治から売り出されたばかりの秋水餅を送ってきた。富治は堺為子（堺利彦夫人）にも送ったと書いている。だとすれば秋水餅は昭和30年ころ商品化されたとみて間違いないだろう。

菓子には「幸徳秋水小傳」なる葉がついており、冒頭「民主人民政府の人柱にあがった革命家幸徳秋水は・・・」から、秋水の生涯を長々と解説しており、「大逆



事件は当局のデッチアゲで、秋水餅をつくったのは、店が秋水ゆかりの自由亭跡地（自由民権家たちが集まった演説会場）に建てっており、また秋水墓にも近いからだ、と、熱い思いが溢れている。

これは父の金喜さん（1917〜1991）が郷土史家上岡正五郎氏と相談しながら書いた。店には秋水写真を飾っていたそうだ。金喜さんは1971年、当時の中村市が「秋水刑死60年記念幸徳秋水展」を開いたさい、富治から頼まれて買った秋水書と堺利彦書を貸してくれた記録が残っている、それを探して見せてほしいと頼んでいる。

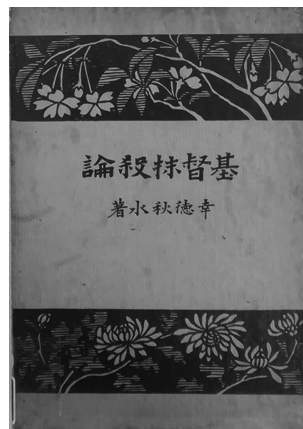
秋水餅は最初のころは、普通にあるような餅であったが、当時は包装資材もなく日持ちがしなかったことから、40年ほど前からいまの形に変えた。

いまのものは小さく切った羊羹と餅を、白い米の干菓子で上下はさんでいる。干菓子は四万十川のアオノリ入りと2種類ある。餅というよりクッキーという感じで上品。1ケ140円は決して安くはないので、お茶菓子として、じっくり味わいながら食べるのいいと思う。包装の唐草のような模様は、特に意味はないそうだ。右城松風堂は当顕彰会会員であり、秋水通信や「秋水読本」「絶筆色紙」を店に置いてくれている。秋水墓の説明板にもそのことを書いている。

みなさんも、ぜひどうぞ。

秋水「基督抹殺論」を読む

顕彰会会員 広井健二



あらわれ、聖書が科学的・実証的に研究された論文が発表されるようになった。秋水の「基督抹殺論」は、当時の西洋の最先端の神学研究の成果をいち早く日本に紹介した刮目すべき啓蒙書であった。

二、秋水の師中江兆民は唯物論者であり、秋水は若い時兆民から唯物論を学んだ。

三、その後秋水はアメリカへ一時亡命、そこで無政府主義者と接触、彼らのほとんどが無神論者でありその影響をうけた。

四、当時日本の社会主義運動にはキリスト教徒が多かった。秋水は彼等に「科学的社会主義」を啓蒙するうえで、基督教を叩く必要性を感じた。

「基督抹殺論」の内容

幸徳秋水は、この原稿を1910（明治43）年4～5月、保養先の湯河原の宿で書き始めた。ところが、6月1日突然逮捕され身柄を東京へ送られる事になり、未完の原稿は官憲に没収された。

11月9日予審の結果が出て、事件が大審院で公判に付されることになり、少し自由な時間ができたので筆と墨を借り、五カ月ぶりに監房の中で執筆を再開した。

1910年11月20日脱稿。秋水刑死後8日目の翌年2月1日発行。発行者は高島米峰。発行所は丙午出版社。本文148頁。正価70銭。秋水最後の著書となる。

発行から一週間後の2月8日に再版。続く一ヶ月間に7版を重ね、その後1921（大正10）年に9版、更に1928（昭和3）年改版、戦後の1954（昭和29）年に岩波文庫から「完全版」が発行された。

秋水が本書を書いた背景及び動機は次のようである。

一、歴史的に西洋文明は聖書の文言を基本的に妄信し、カトリック教会の唱える「三位一体のキリスト」なるものの実在を信じてきた。19世紀になり、ヨーロッパでも、基督教の真实性を疑問視する神学者達が

ス基督もそれを踏襲したにすぎない。
秋水曰く。宗教とか信仰というものは、祖師が宗教を作るというよりもむしろ宗教が祖師を作るというのも決して珍しい事ではない。

秋水曰く。基督教の經典新約聖書はユダヤ教をはじめとする他の宗教の經典のコピーである。基督の口から出たと称する教訓の中に、極めて崇高善美でいささかも非難のしようない言葉がある。だが残念ながら、これらの教訓は基督教が創始したものではなく、実際には基督教の発生に先立つ数百年から一千年も昔の時代に釈迦、ゾロアスター、孔孟、老荘等の諸聖賢が懇切丁寧に教諭してきたものである。例えば基督教の黄金律として知られた「自分にしてもらいたいことは、ほかの人にもそのようにしなさい」という一説は、紀元前五百年の昔に既に孔子が説いた言葉である。

秋水曰く。基督教にはイエス基督自身が書いた文書は一つもない。しかし、四人の弟子達（マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネ）により作ったとされる四福音書がある。（成立はマタイとマルコ紀元後44年、ルカ55年、ヨハネ96年か97年）これらの福音書が基督教徒により新約聖書としてまとめられ、イエス基督の存在を証明し基督教を理論的に裏付けられたとされる。しかし、死後50～100年後に書かれたと言われる福音書は、自分たちの都合の良いように脚色してまとめられた、事実と反する非科学的な偽書なのである。

秋水曰く。イエスが張り付けにされたとする十字架の「十」は男性器、「〇」は女性器。「十」は男女の結合を象徴したものである。但し、男女の生殖器は当時の常識では「神聖な力の最高位」「崇敬的」と考えられた。何故なら古代の人々に拡がっていた二大信仰は、一つは子孫繁栄の源である生殖器崇拜であり、もう一つは生殖器を理想化したものとして全ての生命の源である太陽崇拜だったから。従って十字架は男性の生殖器の象徴としてイエス信仰の、女性の生殖器はマリア信仰の対象となつて共に基督教徒から崇拜されてきた。

最終章「結論——抹殺し了る」で秋水曰く。「基督教徒が基督を史的人物とみなし、その伝記を史的事実と信じるのは迷妄である。虚偽なのだ。真相実態を暴露し、これを世界の歴史から抹殺し去ることを宣言する」。

「基督抹殺論」から透けて見えるもの
私には秋水が表向きは「基督キリスト」と基督教を批判しながら、実は「天皇と国家神道（天皇家）」を同時に批判しているように思えてならない。何故ならこれらは「ウリ二つ」だからである。例えば、

一、基督（救世主の称号）と基督教
①イエス基督は福音書により神格化された。即ちイエス基督は「三位一体の神の子」。

②基督教は神が作った唯一神の宗教であり、世界で一番優れた宗教。

二、天皇（大王の称号）と国家神道

①天皇は古事記と日本書紀（記紀）により神格化された。即ち天皇は太陽神「天照大御神」の子孫神武天皇を始祖とする「万世一系の現人神」。

②国家神道（天皇家）は太陽神が祖の宗教で全ての宗教の上位にあり特別の存在。

三、福音書も記紀も根拠のない作り話であり、それを多くの人が盲目的に信じている。

結論

私は「基督抹殺論」を書いた幸徳秋水の「真意」を次のように分析・推測する。

一、称号の「基督」対「天皇」

二、主の「神の子イエス基督」対「現人神天皇」

三、主を讃える「基督教」対「国家神道」

四、經典の「新約聖書」対「教育勅語」

五、經典の元になった「福音書」対「記紀」

六、主を崇拜する「基督教徒」対「日本臣民」
本書は基督を天皇のメタファー（隠喩として描いた「天皇制批判の書」即ち「天皇の神格性を抹殺する書」である。

岩崎革也と幸徳秋水

『書簡に見る関係性』

幸徳秋水刑死108年墓前祭 記念講演 (要旨)

京都丹波岩崎革也研究会 奥村 正男

私が丹波の先覚者岩崎革也と巡り会ったのは今から50年近く前、赴任先の高校で担任した生徒の中に、この人物の曾孫にあたる生徒が在席していたことが始まりだった。

何度か家庭訪問のために訪れた際、祖母から示されたのが非公開の資料類、幸徳秋水や堺利彦から届いた書簡類だった。大切に保存をされていたものが、虫食いなど全くなく良質の保存状態だった。

近いうちに詳細を見てみたいと思いつつも時間が過ぎてしまい、二度目の巡り会いは、京都縦貫自動車道路延伸計画に伴い立ち退き問題が発生し、再び巡り会うことになり、資料保存や目録づくりを急ぐことになった。

幸徳秋水と岩崎革也の関係を示す資料類は実質書簡を除くと無きに等しく、状況を積み重ねて推察せざるを得ない。その主は革也宛の書簡と言える。

革也の父親の藤三郎がキリスト教にのめり込む息子を案じ、大阪へ株式などの知識習得を考慮して出向かせた。

ここで革也が出会いを得たのが中江兆民だった。また、秋水もこの時、兆民の書生としてここで学んでおり、ここで二人の出会いが想像される。

また、岩崎家と親戚関係にあった三輪田眞佐子女史の立ち上げた「三輪田高等女学校」へ長女きぬを入学させたが、秋水の妻となる千代子女史もこの三輪田女史の薫陶を得たことも明らかであり、秋水もまたこうした事実を知っていたと窺える。

秋水から革也に宛てた書簡が最初に届

いたのは1903年(明治36年)12月付である。これによると革也より丹波の松茸が届けられたことへの礼が記されている。また、資金援助が幾度となく革也から行われ、その都度感謝の思いが伝えられる。こうして二人の関係は深まっていく。

私たちにとって大変な衝撃だったのは、秋水刑死の日(1911年1月24日)、秋水著『廿世紀の怪物帝国主義』(1901年)の表紙裏に、「この書を取り出して黙読していると、今昔の感慨が心に迫ってくる。秋水は獄中でどんな思いかと想像するだけでやりきれなく」と記しており、革也の切なさや身に染みる。

この後革也は上京し、堺利彦、大杉栄らと協議して犠牲者らの遺族慰問が話し合わせ、革也はその旅費支援を約束し、130円が堺に支払われる。

堺が土佐中村に赴いたのは、この年の4月23日と書簡が伝わる。秋水墓地隣の裁判所の絵葉書があり、その表に「老鶯が頻りに鳴いている」ともの悲しさを伝える。

神崎清著『革命伝説大逆事件』第4巻によると、堺は4月22日・26日まで

中村に滞在し、「秋水の墓石の建設、遺産印税の分配について駒太郎と相談をした」という記述があり、もしこれが事実だとすれば、この時の秋水の墓と現在の墓と違うということになるうし、今後明らかにされるべき課題と言えよう。

秋水からの革也宛書簡の束を整理すると、1通差出人不明のものが挟まっており、秋水書簡と確認されるのは25通である。

内容を見ると、平民社への資金供与がほぼ中心であり、時には当局の監視を配慮し、革也の氏名を秘匿した説明などもなされている。

公表された分を見ると、平民新聞第60号(明治33年1月1日)「平民社維持金寄付廣告」に革也分が7百円あり、この年の寄付小計751円87銭の90%を超えていることが、明らかにしている。いかに秋水らが革也を信頼し、スポンサーとしてその支援に期待を寄せていたかが想像されよう。

秋水は一時米国へ渡る意を革也に伝える。1905年(明治38年)8月16日付の書簡だが、これによると、自身の健康回復と併せ、米欧同志との連携、米国拠点づくり、日本における運動および日刊新聞への資金募集などを目的と伝える。こうした秋水自身の思いを伝え、同時に革也の意見を聞かせてくださいと記されており、多分革也も何らかの応答をしたと推量されるが、残念ながらそれを示す書簡は見つかっていない。

秋水の妻だった千代子女史の書簡は8通残っており、この中では千代子が革也を評して「東洋のラサル」などと表現しており、秋水がこのような物言いをしていただと推察される。何度か獄中の秋水を見舞っては革也に安心させるべくその様子など詳細に報告している。

秋水に代わって幸徳家を支えた義兄の

駒太郎(養子として入った人物)から革也に宛てた書簡は当人分が1通と息子富治からの分が20通残されている。

富治からの書簡の大半は、秋水と革也に深い縁のある中江兆民の絶筆の書の購入を求め、その代金により自身の新聞発行資金にしたいという思惑を伝える。

何度か書簡のやりとりがなされるが、革也は手付金と100円を届けるも結局この書は届かず、紆余曲折を経て高知県立文学館の中江兆民コーナーに収蔵されている。

話の結びとして、私たち京都丹波岩崎革也研究会の活動の現況として、昨年、堺利彦・為子書簡をまとめ『岩崎革也宛書簡集I』を発行したが、今年度は幸徳秋水・千代子・駒太郎らの書簡をまとめ第II巻として上半期中に発行したいと準備中であり、期待をいただきたい。

また、今年は岩崎革也生誕150年の節目にあたり、今後の活動として地元京丹波町にて、地域の先覚者として住民の暮らしとどう向き合って活動した人かを知っていたらどうかと催しを検討中である。革也は教育、道路、治水事業など多岐にわたって活躍をした。

かつて革也は衆議院議員をめざしたことがあり(明治41年)、早い段階で「廿歳以上の者に悉く選挙権を与えるべき」という斬新な意見を述べていた。

革也の目線の先には地域の青年らを見据え、こうした発想を提示したと推測される。彼が感化された中江兆民の自由・平等の理念がこうした行政家としての行動に影響を与えたと思える。先覚者としての一面を感じさせる普通選挙論だろう。

その点から言えば、幸徳秋水もまた中江兆民から受けた自由・平等の強い理念に導かれ、それをさらに推し進めようとした思想家として相共通する側面と言える。



四万十市立中央公民館